スゴ腕技術者に学ぶ≫ ―第11回―

海外で活躍するトンネル掘削スペシャリスト編

［登壇者］阿部玲子
（株）オリエンタルコンサルタンツ　GC事業本部

本企画で初めての女性技術者。
海外を拠点に、かつての日本では女性が入ることも許されなかったトンネル工事の現場で働き、
現在は海外の現場で安全・品質管理を行っている阿部玲子さん。
そんな阿部さんに技術者になるまでの経緯や海外での経験を本音で語っていただいた。

腕 土木を知る

学生時代はとにかく英語が嫌いだったという阿部さん。共通一次試験、今で言うセンター試験の点数も低かったという。それでもものづくりが好きで、「自分の汗水を垂らしてつくるなら大きいものがいい」という理由から大学では土木工学を専攻した。「当時の私たちが土木に抱く印象は、溝を掘るとか、つるはしを持って何かをやるイメージでしたね」。しかし、大学4年時に土木はそれだけではないことに気づいたという。その当時の担当教官に土木というのは「公共工学」であり、市民の生活の土台をつくる仕事の中で最も規模の大きな仕事だと教えてもらったそうだ。その言葉が今でも、阿部さんの記憶の中に印象深く残っており、土木に生涯を捧げることにした理由の一つになっているという。

腕 あきらめず自らの手で！

入社後、トンネル工事の現場で働きたいと考えていた阿部さんだが、女性であったため現場に入ることは難しい時代であった。これは、当時の建設業界では「山の神は女の神様であり、女が入ると嫉妬して山が落ちる」という言い伝えがまだはびこっていたためである。「どうしようもないですよね。性別を変えることはできませんから」と阿部さんは、当時の気持ちを振り返られた。普通の人ならそこであきらめてしまうところだが、阿部さんは、あきらめなかった。逆に、「女性だったから、いつかやってやろうと思っていた」と語る。この強い気持ちを胸に抱いていたからこそ、阿部さんはあきらめなかったのだろう。

入社してまもなく、国内ではバブルがはじけて土木の仕事が減少し、海外進出が注目され始めていた。そこで阿部さんは、語学力を付け、海外経験を積むためにノルウェーへ留学することを決意した。苦手であった英語力を強化するために、通常の業務時間の前後に語学学校に通うという生活を1年間続けたそうである。これは、上司の理解や同僚の支えにより可能となったとのこと。現在も、その時にお世話になった上司とは交流があり、「人と人とのつながりが財産になる」と語る。ノルウェー工科大学大学院に2年留学し、さらに留学後には、ノルウェーのコンサルタント会社で研修し、岩盤力学について知識を深めた。ノルウェーには男女差別がなく、トンネル工事の現場にも女性は入ることができた。このように、阿部さんは自分に付加価値を付け、土木技術者として生き残る道を自ら切り開いていった。

写真1　現場で作業員に指示を出す阿部玲子氏

写真2　取材風景

あべ・れいこさん

1963年山口県生まれ。神戸大学大学院修了後準大手ゼネコンに入社。1995年ノルウェー工科大学大学院に留学。1997年ノルウェーのコンサルタント会社に研修。2004年（株）パシフィックコンサルタンツインターナショナル入社。現在、（株）オリエンタルコンサルタンツGC事業本部軌道交通部次長。49歳。

日本の品質・安全管理は世界トップクラス!!

帰国後、すぐに台湾高速鉄道プロジェクトに参加する機会に恵まれた。海外経験があり、すぐに現場で活躍できる数少ない技術者として阿部さんが選ばれたのだ。こうして、土木技術者として海外で働く道が切り開かれた。その後、コンサルタントに転職してからも、海外を舞台としたさまざまな仕事を経験した。

阿部さんは、現在インドのバンガロールでメトロプロジェクトの品質管理業務に従事している。このメトロ工事を総括しているのは、バンガロール・メトロ公社であるが、同社には過去にメトロ工事の経験がなかった。そこで、インド・日本・イギリス・フランス4カ国の企業がJVを組んで公社にコンサルタントサービスを提供している。阿部さんは、鉄道工事の経験が豊富であることから、マネージャーとして現地に派遣されている。阿部さんは、「インドは新しいものをつくることには熱心で積極的だが、品質管理や安全管理といったところはまだまだ後回しになっている」ということを指摘する。発展途上国の工事現場では安全対策がずさんなところが多く、ヘルメットをかぶらず、素手や裸足で働く作業員がいるそうだ。阿部さんは、「日本の品質・安全管理は世界でもトップクラスである」と語る。海外経験が豊富な阿部さんだからこそ、日本は品質・安全管理が他国と比べて、徹底されていることを、感じることができるのだろう。われわれ日本人が、発展途上国の人びとに、品質や安全についての管理の重要性を伝えていく必要性があることを知ることができた。

知識や技術を伝える

阿部さんは、現在山口大学の博士課程に在学中でありながらも、日本やインドの大学で、講義を行っている。学生であり先生でもあるという双方の目を持つ阿部さんが、学生に伝えたいことは何だろうかと伺った。「自分の持っている知識や技術を、すべて後輩に伝えること。それが私に課せられた使命」と力強く語った。日本の土木が発展していくためには、若手技術者の育成が急務。今後、日本の土木を背負っていくのは、私たち若手である。海外で活躍する、日本の若手技術者が増えることで、日本の土木は今後、より一層の発展をしていくだろう。

取材を終えて

さまざまな壁にぶつかりながら、どんな時でも前を向き努力を続けてきた阿部さんの精神力には驚かされた。「先生や上司、同僚、友人がいなければ今の自分はいない。」この取材中に阿部さんは、何度も、今まで自分を支えてくれた方に感謝していることを話していた。筆者自身も周りの人に支えられて、今の自分がいるのだと再認識することができた。そして、自分の知らないところで支えてくれている方がいることを忘れずに、立派な技術者になるためにこれからも努力していきたい。

学生編集委員　志田 翔平、相沢 圭俊

今月のスゴ腕技術者からの一言

あきらめないでほしいということ。あきらめた時点ですべてが終わってしまいます。私自身もあきらめなかったからここまでやってくることができました。現場で仕事ができるようになるまで10年、海外で仕事を任せてもらえるようになるまで20年かかりました。あきらめなければ必ず道があると思います。それを探していって欲しいです。それは自分で見つける場合もありますし、人が示してくれる場合もあります。ですが、その人の輪をつくるのは自分自身ですし選択するのも自分です。"棚からぼた餅"は決してありえません。